

政府景気判断の遅れと楽観バイアス

跡見学園女子大学

山澤成康

要旨

2007年夏のサブプライムローン問題の表面化以降、景気に急激な変動が起きている。今後の経済政策立案の前提条件として、政府がどのように景気を捉えてきたか、またどのような見通しを持ってきたかを検証することは重要である。また、政府経済見通しは予算の基礎数値として税収見積もりに影響を与えるため、財政健全化のためにも正確な見通しが不可欠である。

この論文では政府の短期的な景気判断の2つの側面について分析する。一つは判断の遅れである。しばしば政府の景気判断は遅れるといわれるが、過去に遡って検証した例はあまりない。そこで、月例経済報告の景気判断がどの程度遅れるのかについて検証すると、景気の山、谷両者に対して判断が遅れていることが確認された。また、文章情報である月例経済報告を数値化し加工すると、景気の転換点に対してそれほど遅れない指標を作成することができた。

2つ目は予測の楽観バイアスの存在についてである。政府経済見通しには楽観的なバイアスがあると言われるが、直近までのデータを使ってそれを検証すると、予測誤差の分析からは楽観的とはいえないことがわかった。しかし、民間予測機関に対して楽観的で、景気後退期には楽観的なバイアスがある。景気後退局面下の政府見通しのあり方としては、「目標」として高めに設定するよりは、税収見積もりを過大にしないために控えめな予測をすることが重要である。